

発表者氏名（所属）：松木貴弥（大阪大学）

発表タイトル：「弁証法的物質的な身体—『無の自覚的限定』における個物と身体—」

発表内容概要：

本発表では、西田幾多郎『無の自覚的限定』（1932）を検討の対象とする。本書において西田は、「絶対無の場所」からの「下降的・還相的方向」と小坂国継(2011)が指摘するように、「絶対無」や「永遠の今」の作用によって個物あるいは限定された一般者が成立するプロセスを論じている。西田によると、個物は絶対無や永遠の今の作用によって成立するものである。個物はそれらの一部として考えられる。しかしそれと同時に、個物は自己自身を限定する独立したものであり、他の個物と相互に限定し合うものであるともいわれる。このような個物の両義的なあり方はどのように理解し得るだろうか？

そこで本発表では、絶対無や永遠の今の作用によって成立する個物に焦点を当てる。絶対無や永遠の今に立脚しながらもそこから独立している個物の独立性は何によって担保されているのかを明らかにすることを目指す。

発表者の考えでは、個物の独立性は個物の身体によって担保されている。西田において個物の身体は「物質」（五, p. 287）的であるといわれる。絶対無や永遠の今の作用によって個物が成立する時、個物はまず物質的な身体を伴っており、それによって個物は各自の現在に繋ぎ留められている。また個物は、物質的な身体の極限において意識を持ち、各自に固有の世界を獲得する（五, p. 289）。個物は、物質的な身体とその極限における意識を持つことで、現在に繋ぎ留められつつも現在から距離を取ることができている。

さらに、以上のことから発表者は、個物の独立性を担保する個物の物質的な身体は、単なる物質とは区別される「弁証法的物質」（五, p. 290）的な身体として提示し得ると考えている。西田において弁証法的物質は、個物と環境の相互限定を基礎づけるものであるといわれる（ibid.）。それが身体という形で個物に含み込まれているのである。個物は〈弁証法的物質的な身体〉を持っていることで、絶対無や永遠の今から独立していると同時に、他の個物や一般者との相互限定を行っている。

参考文献

西田幾多郎『西田幾多郎全集』岩波書店、2002-2009年。

小坂国継『西田哲学の基層 宗教的自覚の論理』岩波書店、2011年。

発表者氏名（英文）：MATSUGI Takaya

発表タイトル（英文）：Dialectic-Material Body: The Examination of Individuals and Body in *The Self-aware Determination of Nothingness*